

# 友の会だより

第19号



糸からくり人形のある坂井地区(常滑市)の山車  
(絵 鈴溪読本より、本文P4・P11参照)

平成8年9月発行(1996)

## 常滑の歴史を若い世代に

教育長 佐藤 利 光

中央教育審議会は、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」と題しての答申を、この7月に文部大臣に手渡しました。

答申では、21世紀社会を変化の激しい社会と規定して、子供達が将来、その中で生き抜いていくためには、子供達に「生きる力」とそのための「ゆとり」を与えることが必要であるとして、教育の「不易」と「流行」に目を向けながら、完全学校週5日制をはじめ、教育内容の厳選・学校のスリム化等、数多くの具体的な提言を行いました。

私は、この答申の中で、「時代を越えて大切にしなければならないこと」として述べられた、その一つ、「我が国の先達が残してくれた芸術・文学・民話・伝承などを学ばせ、これを大切にすることを培うとともに、現代に生かしていくことができるようにする……」の「我が国」を「常滑」と置き換えて、これを大切にしたいと思いました。

と言いますのは、上記の内容が「国際化に伴う社会の変化に対応した教育の在り方」として述べられていたからです。

私は、国際化時代に大切なことは、国籍や民族を越えて、お互いがお互いを認め、その異なった文化や伝統や生活を理解し、それを大切にしながら、共に生きることのできる、そんな心と態度を持つことを思っています。

そして、そのためには、私達は、他の国のことを学ぶと同時に、自分の国の文化・歴史・伝統等についても、これを学び、国によってのそれらの異なりを、どちらが正しく、どちらが間違っているといったような受けとめではなく、

異なりを異なりとして認め、それを大切にするこ  
とのできる、そんな心  
を持っていないならな  
いと思います。

今、常滑市は、中部新国際空港の建設構想を目の前にして、世界に開かれた日本の玄関の一つであるべく、魅力ある町づくり計画をすすめています。多くの外国人が、この常滑に降り立つことを思いますとき、町づくりと同時に、国際性豊かな精神を身につけた人づくりもまた、大切なことと思います。

この常滑では、既に数多くの国際交流の機会が設けられています。日本人が、日本の文化や歴史や伝統等について、ある程度知っている必要があると同様に、常滑に住む私達がこの「ふるさと常滑」の文化や歴史や伝統等について、ある程度の知識を持っていることは、大切なことだと思います。

こう考えてきて、今、常滑に住む小・中学生が、この常滑のことについて、何を、どれだけ知っているか、どう学んでいるか、そう考えると、いささか心許無い気がします。

「常滑の歴史や文化財について何を……」  
「常滑のすぐれた先人・偉人とその業績は……」  
「常滑の民話や伝統には、どんなものが……」  
「常滑にある記念の石碑は、どこに何が……」  
「消えていく旧地名とそのいわれは……」等、子供達に知っていてほしいと思うこと、教えた  
いと思うことは、この「ふるさと常滑」には、  
いくらでもあるような気がします。



身近な文化・歴史・伝承等についての理解は、現在の常滑をより深く知ると同時に、外国の文化や歴史等との共通性・差異性を考える上で大切なことであり、故郷への誇りと愛情を持つための欠かせぬ条件だと思います。

今、小・中学生が、この常滑について知りた

いと思うこと、知っていたほうがよいと思うこと、これをまとめた一冊の郷土読本「ふるさと常滑」があったら、どんなにありがたいか。国際性豊かな子供達の育成のためにもそんなことを考える現在です。

## 常滑城を憶う

片山忠義

戦国時代の初め、小河村（東浦町緒川）の豪族水野貞守が近隣の土豪、地侍を傘下に治め、三河刈谷に進出、城を築いた。貞守の子、清忠は知多半島の東浦を南下、成岩の榎本了圓を降し、河和の戸田氏を征し、常滑へ進出して来た。

常滑は古くから横須賀、木田氏の一族で常滑殿といわれる豪族が支配しており、その木田氏は小河の水野氏とは親戚関係である。

それ故、水野が常滑へ進出するのに何んの抵抗もなかったと知多郡史は伝えている。

水野が半島に勢力を伸ばすのに、ただ単に武力を先行させるのではなく、その菩提寺の乾坤院の僧が先行していろいろ工作の後、支配する方策を用いたと考えられる。

常滑を支配する事は、伊勢湾進出のための橋

頭堡として重要視したので、清忠は三男の忠綱を常滑に派遣したのである。

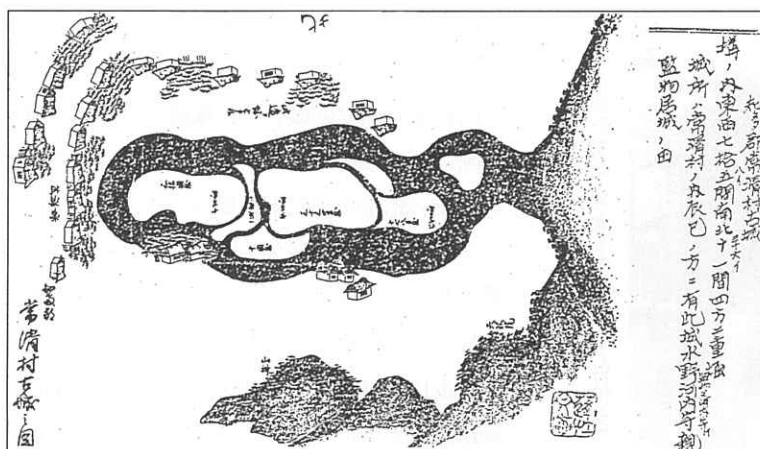
此の忠綱こそが初代常滑城主なのである。常滑城が何時頃出来たのか、これを記録した文書は伝えられていないが、凡そ五百年位前に築城されたと思う。

忠綱について瀧田英二氏の「常滑史話素隠」に次の記述がある。

「事蹟に就いても遺憾ながら殆ど伝える所が無いが、一かど<sup>ヒト</sup>の連歌の愛好家らしく『宗長手記』の大永2年(1522)の條に、此国折節鉾楯する事ありて、矢作八橋をばえわたらず、舟にて同国、水野和泉守館菟屋に一宿、尾張知多郡常滑水野紀三郎宿所一日、野間といふ所に義朝の廟あり、ここより伊勢大湊へ渡り山田につき侍

り……とあり、晩年には佛心を發して一覚齋と号し、寒拾を学ぶ半俗の生活を喜んで居た。」とあり、その隠居所が現在の城の西端、正法寺と思われる。

先年、同寺の古い厨子の中から、「天沢院初開山。二代和尚之靈位」と書いた位牌が発見された。忠綱は晩年自分を城主に導いて呉れた恩師、



知多郡常滑村古城之図(蓬左文庫所蔵)

周鼎中易、雲関珠崇の老師の霊の供養を続けていたと思う。

忠綱 徳容全勝居士

享禄2年(1529)7月13日歿

正室 宝山見泉大姉

天文8年(1539)7月13日歿

二代城主は「寛政重修諸家譜」に山城守、大和守、従五位下。父に継いで常滑の城に住し某年死す。

法名 花鷗 葬地忠綱と同じ……とあり。

水野家譜には、二代城主は、大和守と称し8月11日卒。花翁全榮大居士と称す。

室も又何氏の女と云う事を伝えず。

月桂秋江大禪尼 諱日8月2日 と伝えられるのみで他の事は判らない。

弘治3年(1557)3月、山科言継は、駿河から京都への帰途、三河から大浜をへて成岩に渡り常滑へ出て海路伊勢の長太(鈴鹿市)へ渡った。この記事によれば二代城主は当時山城守と称していた。二男を八郎二郎。嫡男を紀三郎といった事が判る。津田宗及の茶湯日記にも水野監物同喜八とあり、八郎二郎は、のちに喜八郎と改め、天沢院鳳儀和尚の弟子となっている。二代城主も初代同様、連歌を好み、茶の湯も津田宗及と交流のある風流の殿様であった。



堀西の家並(常滑市市場町六丁目付近)

守隆は本家水野信元の女を娶り三代城主となった。小河水野も信元の世となり織田の家臣となったので、常滑水野も織田信長に臣従する事となった。

信長は永禄11年(1568)足利義昭を奉じて京へ上り、守隆は元亀元年(1570)攝津国河口の砦に在陣、天正2年(1574)長嶋一向一揆を安宅船に乗り海上より攻撃。外に数々の戦いに参加しているが陣地の警備が多い。

同年5月には京都の宿舎に里村紹邑、心前昌叱等、当時一流の連歌師を招いて山河百韻を興行している。

「津田宗及茶会記」には天正2年以後、毎年数多くの茶会に出席している。

守隆は京都在住が長く、天正10年(1582)6月2日、本能寺の変に、明智光秀に加担し「当代記」によれば、光秀と共に安土城を攻めたとあり「時の人びと人に非ずと悪之、明智果て後監物は牢人也」

これ故に常滑の城を見捨てる事となり、奥方は熱田に転居。城は清州城主織田信雄の支配下となり、家老の星崎城主、岡田重孝の手に属する事となった。

天正12年(1584)重孝は信雄に伊勢長嶋で暗殺されたので岡田の家臣が叛乱を起し、徳川家康の臣、水野忠重勝成(水野宗家)の父子に攻められ落城。常滑城は旧水野監物家臣、村田権右エ門により無血開城して、家康より緒川常滑家臣團に「本領如前々無相違」と安堵されて、水野宗家、忠重の支配下となった。

その年、小牧、長久手戦の功により家康家臣高木九助広正が清州の織田信雄より所領五百貫を与えられ常滑城主となった。

天正18年(1590)秀吉の命により家康は関東へ移封。高木広正もこれに従って関東へ去り、常滑城は廃城となり約百年の歴史を閉じたのであ

る。

それから約四百年、今では城の痕跡はどこにもなく、次の文献が残るのみである。

江戸初期に書かれた「尾張古城志」には

知多郡常滑村古城

構ノ内東西七拾五間、南北十一間四方二重堀城所ハ常滑村ノ内辰巳ノ方ニ有。此城水野河内守親監物居城ノ由。

「蓮左文庫」に江戸後期に画かれた常滑古城

の図が現存するのみ。又伝承として「城山、堀、中戸、茶水の井戸」等の地名が残っている。

城の台地は大部分削り取られ、市街地となり、現在の市民は戦国時代には高台が連なり百年にわたり城が存在した事等、殆んど知らない。

古き昔の歴史を偲ぶよすがとして、初代忠綱の隠居所の跡に記念碑を建立して後世に残したいと切に願うものである。

## 伊東家の人々 〈坂井村〉

### 鎌田克彦

坂井村は、常滑市南端にあり、潮干狩りや海水浴場として知られている。8世紀の贄代郷と南の富具郷の境界に発達した村で境の語をそのまま坂井としたと云われている。あるいは、野間荘と枳豆志荘との荘界を指しているとも云われている。

伊東家は、この村に約200年前から居を構え、代々医者として、学者として地域社会に貢献して来た。

#### 第1代伊東恵臣（～1803）

伊東恵臣は、尾洲藩士であり、食禄二百石を食んでいたが、故あって浪人となり、叔父伊東玄澤に預けられて、医の修行に励み医者となった。玄司と称し三河で開業した。

江戸時代後期、18世紀後半に、坂井村では、

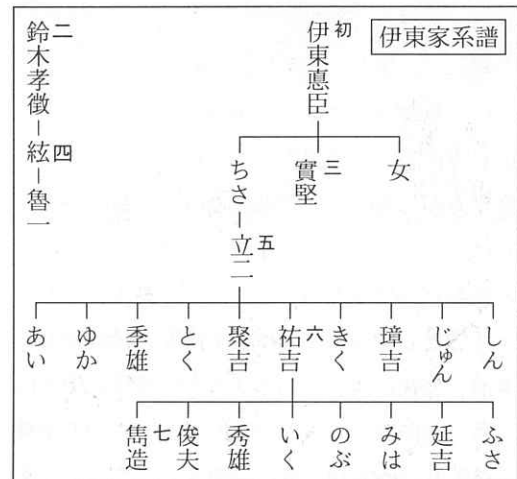


伊東家全景

病で亡くなる人が多く医者が必要としていた。坂井村より招かれ、坂井の永田林右衛門を代父として坂井に入り開業した。

藩士の頃より恵臣は、文事を好み、当時の学者と交わり、絵画に長じ、和歌俳句も得意とした。号は美園、又は、任他と云い、字は瑞郷といった。

伊東家展に扶桑名医姓譜一軸、支那名医姓譜一軸が展覧されていたが、恵臣の筆のものである。(末尾参照)



妻は、三河泉田村佐野幸八の女であり、一男二女あって、長男は実堅といった。長男実堅が

四才の時恵臣は、若くして亡くなってしまった。戒名は堅正院恵應良俊居士。享和3年、1803年歿。

#### 第2代鈴木孝徴（1777～1831）

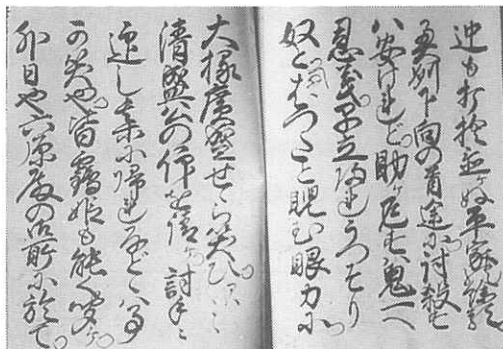
恵臣が若くして亡くなったので、三河八橋の人鈴木孝徴が佐野氏と再婚し伊東家を嗣ぐ。実堅が修行を終わって帰るや家を譲り、子唯二と妻を残し三河へ帰る。堅徳院繁林柳昌居士と云う。天保2年、1831年歿。

#### 第3代伊東實堅（1796～1830）

医学を修めて帰り継父柳昌の跡を嗣ぐ。第1代恵臣の長男である。名は實堅、字は伯考号は節斎玄司。酒を好み、書を好くし、篆刻に最も長じた。34才にて歿す。恵定良斉居士と云う。子がなく、第2代孝徴の子、唯二（絃）が嗣ぐ。

#### 第4代桐齊（絃）（1807～1879）

名は絃、字は士琴、通称は唯二桐齊と号す。



軍術蒼白旗鬼一法眼館段 浄瑠璃

広く学に志し、漢字に深く、経学よりもむしろ文学方面に優れていたと云われる。詩に長じ、名は広く遠近の人の知る所となり、四方の学者と交わり、当地方の一学者として名をなした。

性質としては、豁達にして清明、洒落にして淡泊、金銭に淡く、人と交わるに城府を設けず、言葉も忌憚無く、人の失を回折して、少しも憚る所無し、人々はこれを怨怒せず、思うに、その心中光風霽月の如く誠実にして邪意無ければなり・・・と。

酒を好まず茶を好んで親しみ、最も書を能くし、骨董品を愛した。遠近の子弟が数多く訪問して学んだ。

坂井地区で、今も春祭りに演ぜられる糸からくり人形芝居は桐齊が考案したものである。

糸からくり人形浄瑠璃「軍術蒼白旗鬼一法眼館段」は、鬼一法眼の娘皆鶴姫が、愛をうるために父の兵法書を盗み出し、それを渡す濡れ場とそれを取り返しに来た平広盛公との活劇が圧巻である。

義経公が鞍馬山の修行時代から旗上げまでを扱った「鬼一法眼三略の巻」（12段からなっている）の3段目から人形芝居に作り上げたと思われる。

日本では、1731年(享保16年)に大阪竹本座初演で鬼一法眼三略の巻が上演されている。

坂井では、大工斧次郎に人形を作らせている。人形の胴体に天保15年と刻まれている。大工斧次郎の家は、今絶家となっており知る由もないが、伊東医院の台所改善の際古い柱に斧次郎の名が書かれていることなどから、伊東医院のお出入りの大工ではなかったかと思われる。東光寺の過去帳で調べて見ると節岸自光菴主（明治3年10月5日歿）ではないかと思われる。

地区の人達と祭りを中心に、心を通わせ文化活動を広めた功績は大きい。（鈴溪読本参照）明治12年 肺炎を病んで歿す。73才、絃功桐齊居士と諡す。

#### 第5代立二（1829～1900）

桐齊は、聡敏な息子魯一郎を失い、大野町の加藤清六家より養子立二を迎え跡嗣ぎにする。立二の母親は、第1代恵臣の娘に当たり、桐齊にとっては母方の甥に当たる人である。

名は立、字は士行、号は亀陵、幼名は受助又は延吉。

性格は沈毅にして剛邁、事に臨んで果断であ



る。經学に造詣深く、心志確固たり。陽明学を修めて実践躬行の人である。その性剛胆にして周密なる思慮あり、経済の術に秀で家を興す。中興の人である。

地域の人々より信用も厚く、事あればその解決を求め、意見を聞いて事に処すことが多かった。

医術を宇津木昆台に学び、師の死後、大阪の外科医華岡青洲の門に入り、舎の長となる。

華岡青洲（1760～1835）は、江戸時代後期の外科医であり、チョウセンアサガオから麻酔剤をつくり、日本初の乳ガン摘出に成功した方である。立二（1829～1900）は、年代的に見て華岡青洲には直接指導を受けていないと思われる。

立二は、陽明学を学び、坂井に帰ってからも遠方より数多くの書生が集まって来るようになった。明治5年に大谷村に資済学舎を設けて英語の授業を行った。良い教師がなく程なく中絶となった。明治の初年にこの企画があり驚くべきである。

半田の中埜半左衛門氏や小鈴谷の盛田命棋翁と産業を興すには学問が大切であることを論議したりした。

多芸多能にして、博物学的才能に富み、書画骨董の鑑識眼高く、手工は巧みであり、剣柔音曲もこなし、すばらしい人であった。明治33年歿す。亀陵立操居士と諡す。

#### 第6代祐吉（1562～1945）

祐吉は年若くして、名古屋の好生館病院へ修行に行く。好生館病院は規模施設とも最大の私立病院であり、明治時代の人々には思い出深い病院である。名古屋城の堀端の西側にあり、現在のホテルナゴヤキャッスルの所にあった。

好生館病院は、陸軍軍医監 横井信之が、明治12年に創立したものである。当時横井信之は愛知病院長、愛知医学校の校長を兼務しており、

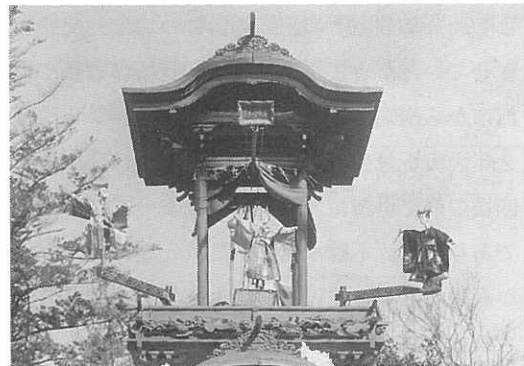
洋医学養成の必要を痛感し私財をもって私塾好生舎を設け、医学の講義を行うとともに患者の診察にあたった。多くの医者を養成し、医学の進歩に貢献したのである。

祐吉は、医学生4人とともに勉学に励み、19才の時医術開業試験に合格したのである。明治15年のことである。

横井病院長からドイツ留学の推薦をされたが、父が年老いて体が弱っていることや、研究よりも病人を治療したいと言って、留学を辞退して坂井に帰って来たのである。

明治19年24才の時、父の跡を嗣いで開業をする。祐吉先生のみたてが良く、肇陽堂・大観堂の名が広まり知多半島の各地から患者が集まって来るようになった。胃腸病の名医伊東右人先生の誕生である。（右人は祐吉の号）

「私が治すのではない、あなた自信が治すのです。」と云って患者に接するのである。3棟5室の病棟を建設し、薬剤師や看護婦もおいて大変多忙であった。



糸からくり人形芝居

白いあごひげをたくわえ、いつも優しく慈悲深くふるまい、眼力も鋭く、先生に看てもらっただけで治るのである。先生の人柄が人の病を治すのである。医は仁術なのである。

人力車で町を往診に出かける姿がきのうのことのように思い出される。薬代の払えない人には、二度と請求をしなかったことが今も語りつ

がれている。

昭和20年、肺炎をわずらい82才の高齢でこの世を去った。仁徳院祐翁松齊居士と諡す。

伊東延吉 (1891~1944)

第6代祐吉の長男に延吉がある。優秀な方で鈴溪義塾の溝口幹先生の感化をうけ、愛知一中、一高、東大と進み、大正7年文部省に入り思想局長兼専門学務局長、文部事務次官、国民精神文化研究所長を歴任し、日本の進む方向に大きな役割を果たした。(鈴溪読本参照)

伊東秀雄 (1902~1983)

祐吉の2男、東邦瓦斯専務取締役、岐阜瓦斯社長

伊東俊夫 (1904~1991)

祐吉の3男 伊東細胞発見(蒼穹参照)

第7代雋造 (1909~1987)

祐吉の4男として誕生。第7代医者として地域の医療に貢献する。昭和17年白血球のゴルヂ装置で博士号を取得。小鈴谷村教育委員。坂井祭保存会会長として力を注ぐ。79才で歿す。修徳院雋山良医居士と諡す。

小さな坂井村に、約200年に渡って住し代々医者として、学者として地域社会に貢献して来たことに敬意を表するとともに、知多半島に坂井村ありの意気を感じざるを得ない。

十分な説明も出来ず不本意ながら筆をおく。

(注)平成8年春「我が家の歴史展」で広く紹介し、更に筆者と元小鈴谷小学校校長青井吉一氏が「伊東家の人々と坂井」と題して講演した。

## 御 觸 留

久 田 光 文

西阿野村で庄屋を務めた家に保存されておりました「御觸留」の記録内容について一部発表させていただきます。横須賀代官所の管轄で東海市から南知多豊浜地区迄、元治元年から慶應2年丙寅正月(1866)に至る間、当時は徳川幕府崩壊の前で世情は大変緊張が高まっていた時代であります。不穏な情報が乱れとび、又諸物価が高騰するなど住民生活は大変であったと推察されます。しかし、この御觸留の記録からは、総じて治安が安定していたように思われます。

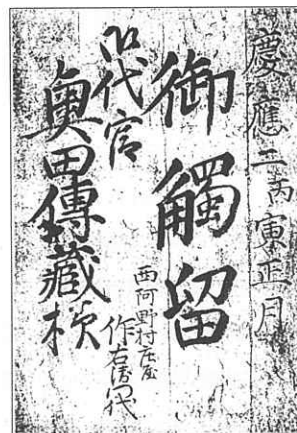
### 1. 年貢

代官所に納める年貢について、貫高(金納)を認めており、尾張藩は米経済から貨幣経済に移行しております。(注)豊臣秀吉が行った検地以降貫高を改めて、石高制となる。

金一兩に付、米1斗9升5合・餅米2斗・麦2斗7升5合・大豆1斗8升。の換算になって

おります。

慶應2年7月1日に西阿野村に対し、麦代金39兩1匁7ト1厘を横須賀陣屋へ上納させておりますが、金1兩に付1斗4升2合の換算になっ



ており前記の換算より更に厳しくなっております。(注)江戸時代1兩に付米1石が相場。

各村々の田畑の検見・上納米の算出方法・納



入場所また、札差の存在等について詳しい記録があれば大変参考になったと思います。

## 2. 馬沓の供出

各村々に対し度々草鞋・馬沓を供出させております。牛のわらじであればともかく馬沓については初耳の方が多いかと思ひます。

## 3. 山廻り

役人が村人を従わせて、各村々の山林を巡視しております。この役人達に対し接待が派手になってきている。代官から、規定以外の酒肴等の提出を差控えるよう忠告しており、良識の面



が伺われます。役人に対する接待は今日何等改善の進歩が見られておりません。

立木については相当厳しく管理が行なわれていたようです。(注)尾張藩においては、武儀郡上有知村一ヶ所役人に対し山廻り絵が支給されていた。

## 4. 人足の動員

各村々から237人の人足を動員しております。その賃金749両2分13厘、この銀44貫983匁、1

人に付189匁5分7厘が支拂れております。この動員の目的、場所について記録がなく不明で残念ですが、かなりの大事業が行われたものと推察されます。

## 5. 武芸

百姓共の武芸稽古は禁止しておりますが、時勢変遷に付非常守については認められている、当時世風により非常守以外の者まで武芸稽古に励み、本来の農耕を怠っている、如何なる風聞があっても農耕に励むよう心懸けよと忠告しております。国を憂う若者、壮年者が立上ったことでしょう。

## 6. 干草

樽水村100貫、西阿野村100貫、熊野村45貫、枳豆志組に対し650貫の供出を命じています。この件について代官所から農民に対し農事の暇々に干草をいたし、貯え置く様心懸けよとアドバイスをしておりますが農民にとっては大変な労力であったことでしょう。

## 7. 公方様の対応

公方様が熱田宿へ来着、その際西阿野村から庄屋代一人を差添えて人足55人を横須賀陣屋まで差出すよう伝達しております。恐らく警備と雑役で狩り出されたものでしょう。

今日ならば官民揃って鳴物入りで歓迎というところですが、公方様の出発が終るまで小見せ物の興行、併に遊芸、音曲類を一切差止しております。静かにお迎えすることになっており大分と相違をしております。

# 常滑の焼酎瓶

柿田富造

常滑で、焼酎瓶が生産されたのは、明治18年(1885)から昭和40年(1965)頃までの約80年間で

あって、その間、一時期は常滑焼にとって、土管・建築陶器に次ぐ重要な生産品になったこと

もある。今、その歴史を振り返ってみると、常滑の焼酎瓶は倉柿田製陶所の業績に負うところが大きかったと思われるので、同製陶所も含めて歴史を追ってみることにする。

常滑の焼酎瓶のはじまりは、「常滑陶器誌」(明治45年)によれば『明治十八年杉江嘉左衛門は本郡坂井村大崎久兵衛氏の依頼により創めて真焼の焼酎瓶を作れり氏は今や是れが製作を中止すれども柿田仙之助等代て盛に製造せり』とある。更に、知多郡史(大正12年)には『其動機といふのは、大崎久兵衛氏が、焼酎味醂の容器について在来の容器である樽では、同品の大禁物である変色(黄色)を呈し、其品位の損するのを嘆いて、陶器で適当な容器を製することが出来たならば、酒造家の渴望している品であるから、非常に有望と思ふで、大いに努力してはどうかと、杉江嘉左衛門氏にはかられた。』と書かれている。そこで、杉江嘉左衛門(1871~1931)(奥条・梶間口)は、大崎久兵衛(~1915)(坂井の酒造家、現美浜町上野間の出身)が持って来た見本の原形に改良を加え、土管と同じ要領で焼酎瓶を手造りで製作した。

上記2種の資料からでは、柿田製陶所(奥条・窯脇)が焼酎瓶を生産し始めた時期はよく分からないが、焼酎瓶を最初に開発した杉江嘉左衛門の工場に隣接していたこともあって、割合早い時期に情報も入手していたと思われる。明治36年に開催された第5回内国勲業博覧会には、9代柿田喜八(1847~1917)は陶器漬物瓶を出品した。焼酎瓶は、この漬物瓶の口縁を小さくしたもので、製作に共通点が多いので、大体その頃から焼酎瓶の開発も始めたものと思われる。その裏付け資料として、常滑の焼酎瓶生産の初見を調べると、翌明治37年の統計資料に「焼酎瓶その他」として4000円/年の生産記録が書かれている。

また、「愛知県統計書」によると、柿田工場の製造品種は、明治40年は「陶器」、41年は「一斗瓶」、42年は「陶器」、43年以後は「焼酎瓶」と書かれているので、大体41年頃より焼酎瓶が主製品になったと考えられる。そして、「常滑陶器誌」には、焼酎瓶工場の写真に、柿田仙之助工場を掲載しているところから、44年当時には常滑の焼酎瓶は柿田工場が最大手になっていたことも窺える。ところで、焼酎瓶の生産統計資料がないので、需要先に当たる焼酎・味醂の生産量で瓶の生産を推測してみると、我が国の酒類の統計(全国酒造税表・その他[焼酎・味醂を含む]の項目)によれば、明治39年から大正8年にかけて査定石数が248千石から668千石と13年間に2.7倍にも増加しているのので、大体その頃から焼酎瓶も同じように増加していったとみて差し支えないだろう。

初期の焼酎瓶は、2斗・1斗・5升瓶の3種類であった。また、形状も切立形・ピヤダル形の2種類があり、醸造所銘や、中には胴の上部



図一  
標準の一斗瓶  
初期の五升瓶

に雷文等の連続文をつけた立派なものもあった。その上、焼酎などアルコール類は水に比べて素地を浸透し易いので、そのために外面にも釉薬が施され、またよく焼き締められていた。それがその後になって、焼酎瓶の受注は1斗瓶に限られるようになり、形状も逐次切立形に統一されていった。そして、文様も製造者の屋号刻印を除いては付けなくなり、更に釉薬に代わって

食塩釉がされるようになった。

常滑地区で焼酎瓶を製造した工場は、柿田工場以外では「全国工場通覧」(大正9年)によれば④杉江(嘉左衛門)工場、⑤陶器工場が挙げられるし、「常滑案内」(大正9年)には(資)山宗陶器店、(資)瓶組合柴田乙吉、(資)陶産(資)が挙げられ、その頃から逐次各製陶所も焼酎瓶の生産に参入してきたものと思われる。昭和に入ると需要も増加して、昭和4年には焼酎瓶の製造業者は54戸、従業員数275名となった。また業者の所有窯数は1窯が27戸、2窯が8戸、5窯以上が1戸であったことを当時の工業調査書は伝えている。また、統計書では昭和7~17年には、年間20万本以上が生産されるようになり、昭和戦前の絶頂期を迎える。古老の話によれば、瓶の生産が間に合わないので、中古の瓶を掻き集めて納期に間に合わせたこともあるという。

昭和戦後になると、酒の需要は先ず焼酎から復活したので、終戦直後にもかかわらず、焼酎瓶の生産に追われた。しかしその後、清酒類が漸増するにつれて、焼酎の需要は減少し、またガラス瓶に代っていったこともあって、昭和40年頃に焼酎瓶は消滅した。

次に、柿田工場の歴史について述べる。柿田



図二  
初期の二斗瓶

家の過去帳によれば、初代喜八は正保2年(1644)に没しており、製陶の創業は「愛知県統計書」には正保元年(1643)とも、寛永元年(1624)とも

書かれているように古い歴史を持っている。また、「鯉江方寿の生涯」によれば『元禄時代、奥条村にあったという一立(2窯)の窯については、奥条の青池周辺にあった柿田喜八家の窯が、昔からの古いものだと伝えられており、山から降りて来た当時の窯の生き残りとも考えられるのである。』と述べている。今のところ、その裏付け資料は見つかってはいないが、兎に角古い窯元であることには違いない。

また、鯉江家文書には明治7年柿田窯より真焼土管を仕入れている記録がある。鯉江方寿(1821~1901)はおそらく明治初期に柿田家へ真焼窯(登窯)を指導して築かせ、そこで真焼土管を焼かせていたと思われるので、柿田窯は常滑でも非常に早い時期に登窯を焚いていたことになる。焼酎瓶を成長させた柿田仙之助(1877~1963)は、奥田(現美浜町)の西川次郎吉(1853~1942)の長男として明治10年に生まれ、明治13年に喜八家の養継子となった。(因みに筆者の母方の叔父にあたる。)従って、前述の杉江嘉左衛門が焼酎瓶を始めた明治18年当時は、まだ若干8才であったことが分かる。

また、「知多郡統計概覧」・「全国工場通覧」によれば、柿田工場の従業員数は明治40年12名、大正5年15名、9年19名と逐次増加している。仙之助は大正4年(1915)に、9代喜八より家督を相続した。そして、大正7年より四方(資)に一手に納入するようになった。一時、四方(資)に吸収合併されたこともあるが、2年後には再び柿田製陶所を名乗って、従前通り四方(資)に専ら納品している。この四方(資)は、現在の宝酒造(株)の前身であって、当時わが国における焼酎・味醂の生産では抜群の最大手であった。従って、そこからの受注量は多く、柿田工場自社のみではとても賄いきれなかったため、大量に協力工場からも調達していた。そ

して、戦後は化粧した焼酎瓶も手掛けたりして、常に業界の指導的役割も果たしてきた。

わが国の焼酎瓶の歴史を語るには、山口県厚狭郡須恵村・高千帆村などの生産状況も述べなければならないが、紙面の都合により今回は常

滑に絞ってまとめ、別の機会に譲ることにした。なお、この稿を草するにあたり、柿田工場、常滑市民俗資料館・坂井地区・酒造関係者をはじめ、大勢の方々の協力を得た。ここに深甚なる謝意を表する次第である。

## 10周年記念誌“蒼穹”について

今春発刊いたしました当友の会発足10周年記念誌“蒼穹”は、発刊以来たいへん好評をもって迎えられ、5月9日には中日新聞に“陶都常滑の多彩な歴史に光、論文並みの研究など54編、戦時中の対応も詳しく”などと報道され大きな反響をよびました。

さて蒼穹は常滑市の首脳部を始め県議会議員、市議会正副議長、総務文教委員、教育委員、市内各公民館、国立国会図書館を始め県内の各公立図書館、公立大学図書館、市内高中小学校、報道関係、知多地域市町村の教育長、常滑市商工会議所等県内外各方面に贈呈いたしました。当然ながら一般の人々からも続々と申込みがあり、編集の甲斐があったと喜んでおります。

従って現在手持ちは僅かになりましたが、来る10月までに当会へ入会の向には、1部宛贈呈する予定ですので、お知り合いの方にこの際は是非入会をおすすめ下さい。

### 当会役員 山田勇氏逝去

友の会役員 山田勇氏が去る3月19日逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

氏はかねてから地域の産業、歴史、文化の掘り起こし、保存に尽力され、その成果を郷土史部会で発表されるなど友の会活動に協力して頂きました。平成2年友の会文化祭協賛事業に「山田勇、我楽多コレクション展」を開催し大変な好評を博しました。

その後平成8年に「part2」の開催の約束をしていましたが御不幸な結果となりました。先日御遺族に出展をお願いして了解を得ましたので平成8年度文化祭に「故山田勇氏我楽多コレクションpart2」展を追悼の意をこめて開催したいと思っています。

### 坂井の山車と糸からくり人形芸能について。

坂井の山車は、常滑市指定有形民俗文化財であり、糸からくり人形芸能は、常滑市指定の無形民俗文化財です。

第19号、平成8年(1996)9月25日発行、発行所 常滑市民俗資料館友の会、常滑市瀬木町4-203  
電話〈0569〉34-5290 編集担当者 中野健三 印刷 株式会社 好文